

第3回設楽ダム環境検討委員会 議事概要

○日時：平成21年8月6日（木）14:00～17:00

○場所：桜華会館4階「松の間」

○出席委員：松尾 直規 委員（委員長）、小笠原 昭夫 委員、西條 好迪 委員、前田 喜四雄 委員、森 誠一 委員

○議事概要

(1) 設楽ダム建設事業について

委員：道路工事等の工事中に環境へ負荷をかけるものについては、軽減措置について専門家の指導を仰いで事業を進めること。

委員：環境影響評価書にも、工事中の環境影響についての軽減措置が記載してあるはずなので、確実にそれを進めること。

(2) 各委員からの指摘とその対応について

委員：資料2-2の動物の重要な種調査のとりまとめについて、「主要な生息環境において生息が維持されているか」は、「主要な生息環境において生息が健全に維持されているか」という表現の方が良いのではないかと。調査では健全さの程度を見ていくことになるのではないかと。

事務局：ご意見を踏まえて、この部分を修正する。

(3) 平成20年度調査結果及び平成21年度調査計画について

委員：アケボノユウレイグモの行動範囲、分布状況はどうなっているのか。また、移植する場合も、生息環境条件の調査をしているが、同様の未生息地への移植実験も必要ではないかと。

事務局：行動範囲についての情報はない。分布状況については本州に分布するとされている。また、未生息地への移植実験については、本種の生態に関する調査を実施して、データを蓄積しながら進めていく。

委員：アケボノユウレイグモの生息条件に関して、物理条件は比較しているが、餌生物については、わかっているのか。

事務局：アケボノユウレイグモはガガンボ等の昆虫を捕食している。生息状況の調査の中で、アケボノユウレイグモが捕食している昆虫については記録しているが、それに特化した調査は行っていない。今後、餌生物についても調査し検討していく。

委員：アケボノユウレイグモの幼体が冬季に確認されているが、幼体の区別点は。

事務局：幼体については形態のサイズで区別し、データを記録している。幼体で越冬するものと考えられるが、何年ぐらいで性成熟するという情報は文献にもない。

委員：アケボノユウレイグモの調査結果によると、増え始めると考えられる8月に減っ

ているが、これは調査努力量の問題ではないのか。

事務局：調査努力量は一定にしている。また、季節変化に関しては、分散や死亡率等が考えられるが、現在のデータだけでは解釈が難しい段階である。本年度も継続して実施しているので、2年間のデータからさらに検討を行う。

委員：アカショウビンについて、3回の調査でどのように記録されたものなのか。また、営巣については集落周辺だけで営巣する鳥ではないので、調査範囲内で営巣している可能性についても調べていただきたい。

事務局：確認データについては、整理して改めて報告する。

委員：植物の移植実験について、対象種がない場所に移植を行うことで新しい知見が得られると考えられる。また、移植実験後に再び他の場所へ持っていくと手間がかかるため、生育環境が担保される場所に直接もっていくように良い。また、イチョウウキゴケについては、移植は難しいので慎重に進めること。

委員：アケボノユウレイグモに関しては、クモ類の専門家にも意見を伺った方が良い。

委員：アカショウビンについて、なぜ県知事意見で適切に監視することとされているのか。

事務局：アカショウビンについて意見がでていないのかについては、把握していない。

(4) 新たに追加された重要な種に係る検討について

委員：魚類の予測について、流入支川間で交流が減少し、小集団化が生じることがあるので、溪流性の魚にとってダム湖の存在は影響を受けると考えるべきだと思われる。一方で、ダム湖を海のように利用する可能性もある。いずれにしても、個体群として生活史への影響はあると考えられる。

事務局：魚類への影響は小さいと予測していますが、不確実性をともなうところがあると考えられるため、上流の流入支川でもモニタリング調査を行いながら監視していく。

委員：陸産貝類については、三河地方は有名な場所で多様な陸産貝類が生息していると聞いたことがある。陸産貝類に対する配慮についても検討が必要なのではないか。

事務局：陸産貝類については、専門家のチェックを行っているので、精度の問題はないと考えている。一方で、地元の専門家によるチェックは行っていないので、今後、実施することを検討する。

委員：生息情報については、参考文献を明示しているが、内容をそのまま引用したのであれば、引用文献にしておいた方が良い。また、愛知県レッドデータブック等、地元の情報が得られるものを引用した方が良い。

事務局：資料に記載している生態情報については、全て引用ですので、引用文献と修正する。また、生態情報については、愛知県レッドデータブックの内容を引用して整理する。

- 委員 : この辺りはアマゴの生息地であって、ヤマメと交雑は起こらないのか。
- 委員 : 交雑は起こっているものと考えられる。ヤマメがアマゴの分布域に入ってくると、斑紋が特異なものがでてくることが知られている。ただし、これらは溪流魚ということで生活史としては似ているため、これらが生息できるような環境になるように配慮することで良いと考えられる。
- 委員 : 生息環境の改変率はどうやって出しているのか。
- 事務局 : 主要な生息環境の河川総延長に対して、ダムによって消失する区間を割った値が生息環境の改変率ということになる。
- 委員 : ヤマメについて、もともと生息していなかったということであれば、重要な種として挙げなくても良いのではないか。
- 事務局 : レッドデータブックで該当するものを重要な種として検討対象としているが、検討段階において分布域が明確に違うものは影響予測の対象から外している。しかし、明確でないものは一応検討を行っており、影響はないだろうと予測している。
- 委員 : ヤマメについては、影響のあるなしではなく、元々自然分布ではないなら、重要な種から外し、理由を明確に書いた方が良いのではないか。
- 事務局 : この点については、今後整理してまた報告する。
- 委員 : この件に関連して、魚類の放流実績を調べた方が良い。また、捕獲された場合はヒレをサンプルとしてとっておくことも考えられる。
- 委員 : また、ダム湖ができた場合、ブラックバス等の外来魚の温床にならないように、周辺への周知とかの作業も非常に重要なことだと考えられる。

(5) 豊川水系の水質調査実施状況と調査結果の整理について

- 委員 : ダム下流河川の水質の変化について、支川の流入後において、ダムの直接影響かどうかをどのように判断するのか。
- 委員 : 主要な支川が合流する前後で調査地点が設定しており、そこで支川からの流入による影響については把握できると考えている。
- 委員 : 水質以外にも、河床材料、河床変動等の河床環境も非常に重要なので、今後しっかりと把握しておく必要があると考えられる。
- 事務局 : 下流河川のモニタリング調査を実施していく河床材料等の河床環境についても調査を実施していくこととしている。

(6) 魚類検討会の報告

- 委員 : 放流による移植だけで、豊川のネコギギが保全されるという結論にはまだ至っていないと認識している。やはり、エコアップという形で取り組む必要がある。
- 委員 : 関連工事との調整について、ネコギギの生息場としてのポテンシャルについて把握しているのか。また、ポテンシャルの高いところを下げないようにするのは当然だが、護岸工事を機に生息ポテンシャルの低いところを高めるようなことができないだろうか。
- 事務局 : ポテンシャルの検討は行っているが、まだすべては解明できていないため、今後現地調査の中で解明していこうと考えている。また、護岸工事を機にポテンシャルを高めることについては、可能な範囲内で関係機関と協議していく。
- 委員 : 三重県等では、ネコギギが生息しているところに関しては道路工事等に際して、ネコギギに配慮するような形で行われている。国土交通省として、設楽ダムの場合だけでなく、河川に係る道路工事等に関してこのように協議して進めてほしい。
- 委員 : 魚類に関しては、宇連川について河床形態等の調査を実施して、豊川との比較してもらいたい。また、水資源機構の大島ダムでは置き砂実験がなされるということなので、うまく連携しながら設楽ダムと比較するようなこともあって良いと考えられる。

以上